

1. 村方騒動の論理とその内部構造

中利根川流域一村落における

近世後期の村方騒動を中心として

北原糸子

従来、村方騒動は、農民斗争の一類型として近世史に於いて数多く取り挙げられて来て居り、その政治的効果は、直接、幕藩体制を左右するものではないにせよ、村落社会の規模でその動搖を深化させたものと評価されている。そして、多くの場合、村落構造の転換期に於ける普遍的現象と見做され、この場合の分析視角は、一騒動の背景をなす経済的基盤の問題に限られている。

私は、この分析視角とは別の視点に立って問題を設定したい。

それは、個々の農民が一騒動に如何に対応していったかを明らかにしたいという問題意識から出発して、村方騒動の内部構造の解明を主眼とするものである。この場合、近世の村落社会に於いては個々の農民の自立的な対応は極めて限られた階層に属する者にしか許されていないから、結局のところ、騒動に於いて作用する社会的輿帶とは如何なるものかを明らかにするところに向わざるを得ない。

また、騒動とは、社会関係總体を含めたものの相対である以上、經濟的基盤の分析のみでは極めて一面的見方としかならざるを得ないことも、右に述べた視点の必要性を主張する所以である。

更に、もしも、從来言われているように、歴史を変革すべきものとしての農民斗争の一類型として高い評価が与えられるものならば、騒動の内部構造自体にも從来の社会関係を打ち破った新しきものがあらねばならない。しかし、右に述べた視角から明らかにする内部構造に、我々は如何なる新しきものを発見できるだらうかという点を含めて、従来の農民斗争の分析に貫いている分析主体の評価の考え方をも併せて問題にしたい。